舞先輩の
アナルレッスン!
R18
For Adult Only
mon-petit

…

ホントにあなたの言う通りにしたらチームの解散は取り消してくれるのね？

ああ勿論保障しよう

だがここ最近不祥事が多い君達を庇うんだそれ相応の態度を見せて貰わないとだがね

くっ…

君が少し我慢すればみんなとは今まで通り仲良くやれて生活費も稼げる迷う必要があるかね？

…

わかったわあなたの条件を飲むわ

賢明な判断だ

それじゃ早速その邪魔な物を下ろして君の肛門を見せて貰おうか

は、はい…

ほら、ちゃんと見えるように自分の手で広げるんだ

おやおや恥ずかしいからかアナルがヒクヒクと開いたり閉じたりしてるな

ムカァ…

そのたびになんとも芳しい舞くんの臭いが広がってるぞ

わ、わかったわよこ、これでいい…？

ハァ

ハァ

プル

プル

ッッ

カァァ

それじゃさっきの約束をもう一度復唱して貰おうか

う、うん…

わ、私 川上舞はチーム解散を取り消して貰う代わりに一週間私のこ、肛門を

アナルだアナル

ア、アナル使って楽しんでいただく事を誓います

プル

プル

よしよし よく言えたな
う、うぅ…
それじゃ早速 楽しませて貰おうか
ひっ
ストン スン
なっ、なにをっ
何って、舞くんのアナルを解してあげてるんだよ
だ、だからって そんな所… 汚いから…
ほう? 君のここは 汚いのかい? なんで汚いのかね
そ、それは…
プル プル
ぬる…
あッ
ビクッ
ビッ
やぁ… あ…
動いてる… 私のお尻の中で ヌメヌメとしてのが 動いてる…
ひぁ
あっ
ん…ッ
ズポ
ズポ
お尻の穴を 舐めるなんて… こんなの…
フー
フー
んん

あ…

ズチュ…

随分と鼻息が荒かったがもしやアナルで感じたのか？

ち、違っそんなわけないでしょッ

こんなところで感じるなんて…そんなの変態じゃない

ひく ひく

ただ舐められてると全身がゾワゾワして気持ち悪かっただけよ

へえ…ゾワゾワね

ツプ

んっ

ズポ

ズポ

は…

全身まで刺激が広がるという事は舞くんのアナルは感度がいいようだな

ビクッ

ぐぢゅ

ぐぢゅ

ムクッ

やあ…

グイグイ

ガクガク

あぐッ

ズチュ

グチュ

ズチュ…

ふぅ…

今は未知の快感に戸惑ってるだけだが慣れていけばちゃんと感じるようになるさ

そ、んなこと…

あうっかき回され…ッ

あ…っうっ…くッ

ひんッ

は…んっふぅ…うっ

あッ

ハッ

ハッ

んんッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

よし今日はこの位にしておこうか

それじゃまた明日も同じ時間に来てくれたまえ

は…い

ん

私の部屋…？

あれ？私いつ帰って来たんだっけ？

なんだろう？頭がボーっとする…

さっきまで私何してたんだっけ？

ッ！…

今日で三日目じっくりほぐしたおかげで大分緩くなったな
こんなに柔らかいアナルなのにまだ気持よくないのか？
あ、たり前…でしょこんなところで感じるはず…が…んっ…
ふふ
今日はそんな君の為に沢山の道具を持ってきてあげたぞ
え？
例えばこれなんで丸いのが連なった形になってるかわかるか？
そ、そんなの知るわけないでしょ
まぁ口で説明するよりも体感した方がわかりやすいだろうな
いやっちょっと待ってっ変なのをお尻に…
んんッ

あっ…んんっ
ふぅ…んッ
なに…これ…
玉の凸凹がお腹の中を削るみたいに刺激してくる…
それに抜き差しする度に玉一個一個が肛門にひっかかって…
ふーむ…そうかならわかるようにもっと激しくしないとだな
ちょ…まっ…あっ…あッ
その様子だとしっかり感じてるみたいだな
そ、んなわけ…
指なんかより全然…

どうだい？アナルの良さを自覚できたか？
あ…ぁ…
ハァ
ハァ
返事がないなどうやらまだまだ足らないみたいだな
スッ…
んんっ
いや…違ッ私、その…
その？なんだ？
だから…あっ…
とにかくお願いだから1回お尻を休ませてッ
ん！…
ハァ
ハァ
だめだ
あッあ
あ

ひっ…くぅ…
あっ…あっ…
はぁ…んあぅ…ッ
ゴメンナサイッ私嘘をつきましたッ
本当はお尻で感じてましたァッだから…だからもう許してぇッッ
何を今更君が感じてたのなんて最初から見ればわかってたよ
そ、んな…
まぁせっかくだからこのままアナルでイキ癖をつけておこうか
いやぁッッ

駄目ぇ
おしりぃッ
おかし…くぅっ

あっ…ッ
やぁ…ッ
またイクッ

お尻でまた…
イっちゃ…あっ

あッ

…ぱい

舞先輩っ

ハッ

えっ

あ、ごめん なんか ボーっとしてた

またですか？ なんか最近 多いですよ

疲れが たまってるん じゃないですか

ははは そうかも

そういえばほら この間 姫野先生から 個別に頼まれた ファントム退治 あれどうなりました？

え？

えーと… あれはうん

少しづつ 進展、してるよ

きゅ…

ひく ひく…

今日で一週間

舞くんもすっかり
アナルで感じる
変態になったようだな

プ

プ

ハァ

んっ

私が思った通り
君には素質が
あったみたいだ

だって…
こ、んなに毎日
お尻を弄られたら…
誰だって…んっ

ハッ

ガチャ

ギシ

ひく

ひく

ふふ

今日で最後だからな
今まで一番の
快感を与えてやるぞ

グッ

グッ

あ

今まで
一番…

ゾク

君も知ってるように
アナルは弄ってると
血流が良くなり
非常に敏感になる

ぐり

ぐり

その状態のまま
刺激を与え続けると
脳は快感を訴え
体は快楽に身悶える

これは君自身
が今まで散々
体験した事だろう

ぴく

ビクッ

んひっ

ビクッ

ッッ

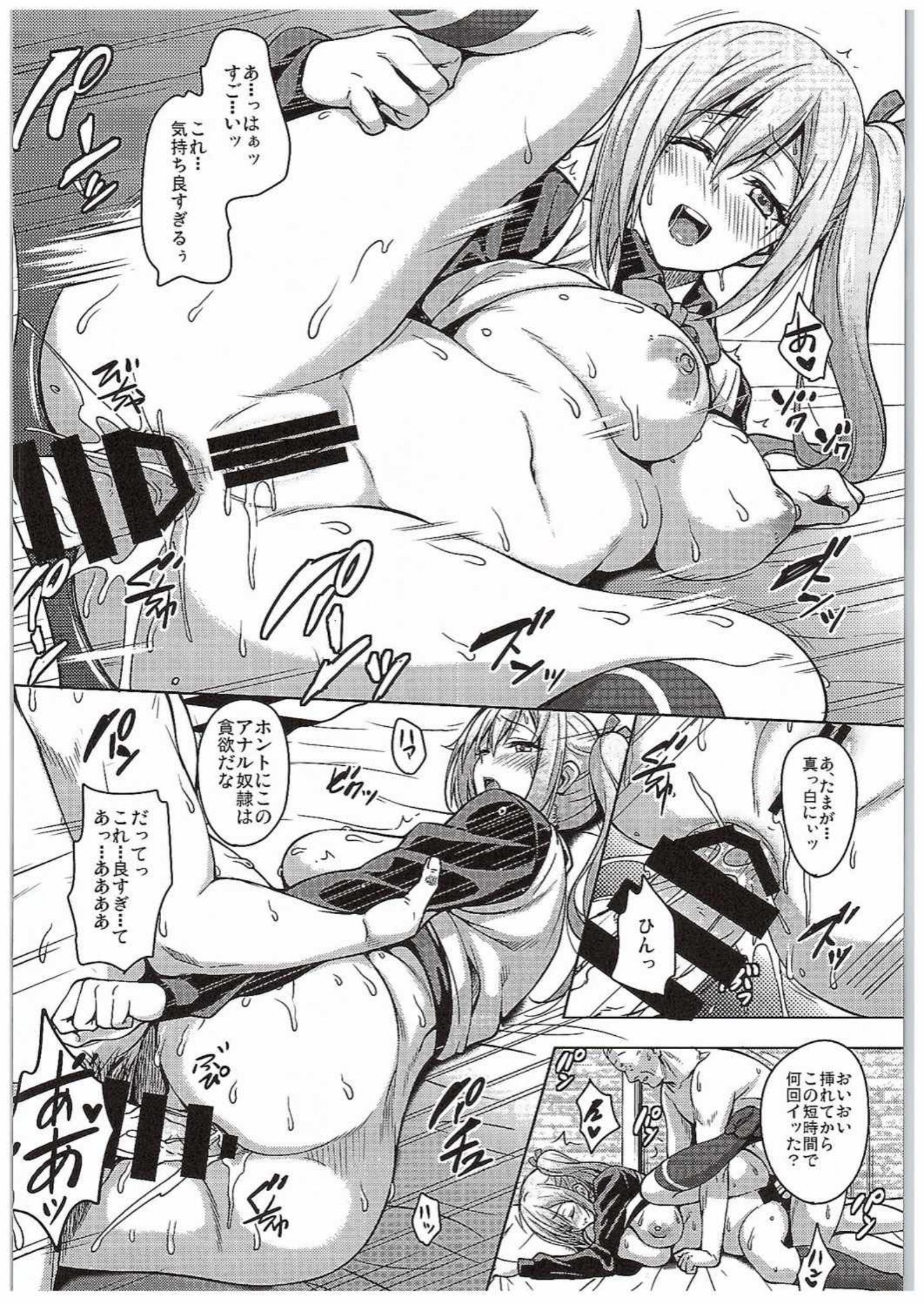
ファァァ…

そして激しい刺激を与え続けてやると絶頂に至るわけだが…
もしイクほどの刺激を与えなかったら？
え？
脳は快感を訴え続けるが絶頂には至らず体は痙攣するほど快楽を感じるが気絶する事も出来ない
まさに快感地獄だ
今日までで敏感になった君のアナルにこのバイブプラグで刺激を与え続けたらどうなるのか？
舞くんはどこまで音をあげずに耐えれるかな？
ちょ、ちょっと待って
そ、そんな事しなくてももうお尻でちゃんと感じるからッ
いや…嘘でしょ…？
これ以上気持よくされたら私…
ひっ
やぁっ…うぅ…
あ…っ
そらそらどんどん尻の穴が敏感になってくぞ
くぅっ
ガチャ
ガチャ
ガチャ
カチ
カチ
カチ
MAX
OFF
ガチャ
ガルル
ビクッ
ガガガガ
ピクン
ガチャ
ガチャ

ひぅ…っ もうお尻が痺れ…っ
あうッ
いやッ もうこれ以上 行ったらお尻がっ
んッ
お願いもう 止まってっ
駄目ッこれ以上 気持よくなったら 駄目ぇえええッッ
あぅッ 来てるッ
お尻から 気持ちいいのッ 来てるぅッ
あっ…ッ ああっ…ッ
あっああああッ すご…ッ おしりぃっ
こんな…あっ だ…ひっううっ
あ、ああぁ ぁああッ
んー…ッ
ふぅうう…ッ
あー…ッ
んくッ
ひっ
ひっ
あー…ッ

大分楽しんでるようだな
もうまともに声も出せてないじゃないか
あー……
あー……
快感で頭がチリチリする
あぅッ
おっと
体に触っただけで感じるくらい体全体が性感帯になってる
ひっ…
ひっ…
それなのにイクことが出来ない
あ…うっ
もうイキたくてイキたくて仕方ないんだろ？
これからもずっとアナル奴隷でいる事を誓うならこれを挿れてあげるよ
こいつでアナルを滅茶苦茶にかき回してイカセてイカセてイカセてイカセてあげるよ
あ…すごい…
いまあんなおおきいのいれられたら…

なります…
これからもずっと…アナル奴隷に…ケツ穴でイク変態になります…
だから私のアナルにその太いのを挿れて下さい…
ハァ
ハァ
ゾクゾク
ぴくぴく
ぴくぴく
プルプル
よく言った
もうどうでもいい
これを挿れられるなら…気持よくなれるならもう他の事なんてどうでもいい
ハッ♥
あ♥
あ♥
これでお前は晴れて正式なアナル奴隷だ
あ、ああ…
ゾゾゾゾ…


あ…っはぁッ
すご…いッ
これ…
気持ち良すぎるぅ
あ♥
あ、たまが…
真っ白にぃッ
ひんっ
ホントにこの
アナル奴隷は
貪欲だな
だってっ
これ…良すぎ…て
あっ…あああああ
あ♥あッ
おいおい
挿れてから
この短時間で
何回イッた？
ん♥

はんッ
ハッ
ん♥
ダ…メッ
お尻…
感じすぎるぅッ
腰が…
止められない…ッ
自分でケツ穴を
ズボズボして
快感を求めるとは
もうすっかり
ド変態だな
あ…んッ
変態でもいいッ
こんなに気持ち
いいなら私…
変態になりますぅッ
ハッ
あ…ッ
また、イ…くッ
あッん♥

あッ♥ それぇ♥
ハァ
乳首ぃッ そんな扱かれたら またイッちゃ…♥
あン♥
そろそろ イキそうだ…
次は私に併せて いきなさい
ハッ
ハァ
ハァ
は…い

あッ
パン パン
あ、あっあっ 私またっイッちゃう またイキそうですっ
早くっ 私もう我慢がぁっ
ドチュ ブジュ
ゲチュ
よしっ こっちももう出るぞ
あ、ああっ
ビクッ
ひッ
ああ♥ あ♥ あ♥
ビクッ
すっかりトロけた 牝の顔になった
ハァ…
ビクッ
ハァ
これからもずっと アナルでよがり 続けるんだよ 舞くん

川島舞の調教ご苦労様でした

この仕上がりならクライアントも満足するでしょう

処女のままアナルで絶頂する変態奴隷…さすがにいささか苦労しましたよ

ふふふ…学校運営の為のとはいえスポンサーの要求に応えるのにはお互い難儀しますね

それにしても我々ファントムの力を利用して催眠状態から少しづつ意識と肉体を改変

心身ともに淫乱に変えてしまうこの仕組を考えたあなた方には感服しますよ

あなた達ファントムの力のおかげで以前よりスムーズに商品を作れるようになりました

排除すべき存在の我々すら利用するとは…いやはや真に恐ろしいのは人間ですね

それは当然でしょう

ファントムとは人の強い思いから生まれる存在

その根源たる人間の深淵には深く及ばないのは

ニィ…

あとがき

どうも、はじめまして＆お久しぶりです。もんぷちです。

今回は無彩限のファントム･ワールドから舞先輩です。

もうね、ホントに舞先輩はエロくてツボに入ったキャラでした。
京アニさんの描く女性キャラはガタイがよくてムチムチしてて
エロさが最高だと思います。

何よりブルマ、いいですよね…。

本の内容の話をするとアナル！アナル！アナル！って感じなんですが
これは舞先輩のアナルをめちゃくちゃにしたい！という衝動に襲われたからです。

それと本来ならページ数が少ないので二部作にして前半はアナル調教編
後半はみんなの前でお披露目編にしようかと思ったのですが
思いの外オチとして落ちてしまったので後半はまぁいいかなってなりました。

あとオチにファントムの幻覚ネタを使うなら最後はファントムによる
触手プレイとか諸々考えたのですが時間的に無理だわーってなって諦めました。

毎回時間を言い訳にしてますね。

まぁこんなところでしょうか。

商業の方はちょっといまスローペース気味ですが
ボチボチやっていこうかと思ってます。

とりあえず近いうちにメガストアαには載ります。
その後は未定です。

それと追加ページとしてイラストとシナリオを書いたのでそちらもどうぞ。
漫画で描けなかったスカ要素があるので苦手な方は本をそっ閉じしてください。

最後に今回はこの本を手にとっていただき有り難うございました。
特殊な内容ですが使えて貰えれば幸いです。

「おやおや、中には茶色い物が沢山詰まってるな」
男はクスコ？とかいう道具で私のお尻の穴を広げてそう言った。
「それにひどい臭いだ。部屋の中まで充満するようだよ」
男は下品な笑いを湛える。
「一体これは何なのかな舞くん？教えてくれないか？」
「そ、それは…」
そんなの1つしかないじゃない。
私の口からわざわざ言わせようなんて
どこまで人を辱めれば気がすむのだろう。
「…ウ、ウンチよ…」
私は顔を真赤にして答えた
一番人に見られたくないものを見られてる。
今にも恥ずかしくて死んでしまいたいくらいだ。
「ハッハッハ、そうかウンコか。
舞くんみたいな子でもウンコは溜まるんだな」
「当たり前でしょ！そんなの誰だって同じよ！」
羞恥心から私は声を荒げる。
そんな反応も楽しいかのように男はまた大きく笑った。
「しかしケツの中がこんなではアナルを弄れたものじゃないな。
この沢山溜まった臭いウンコを出さないと駄目だな」
確かにこのままでは私のウンチで汚れてしまうだろう。
「そ、それじゃトイレに行くからお尻のを外してよ」
「いや、トイレに行く必要なんてない。ここですればいい」
「は？」
いま、なんて言ったの？
ここですればいい？　聞き間違い？
「いきなり出せと言われても無理だろう。浣腸をしてあげるよ」
「なッ」
浣腸？嘘でしょ？
まさかここでウンチをしろとでも言うの？
「ふ、ふざけないで！そんなの…出来るわけないじゃない！
人前でウンチなんて…そんなの普通じゃないわ！」
おもわず私は声を荒げた。
「おやおや、君みたいな子がアナルを好き勝手に弄られる
これも普通じゃないと思うが？」
「それは…」
私は言葉に詰まってしまった。
確かにこんな場所にいること自体普通じゃないのだ。
しかしウンチをするなんて女の子なら一番他人に見せたくない行為だ。
「でもだからって…」
「嫌というなら別に構わないぞ。
そのかわり君のここ数日の努力が無駄になるだけだ」
男はいままでのニヤけ面を止めて冷たく言い放った。
確かにここで拒否すれば何もかもがなくなってしまう。
「大切なモノを守るためなんだろう？」
そうだ。そのとおりだ。
私には拒否権なんて最初からなかったのだ。
「わかったわよ…すればいいんでしょ」
私は表面上投げやり気味に言った。
これが精一杯の抵抗だったのだが男に見透かされていたようだ。
「そんな言い方じゃ駄目だな。
ちゃんと『浣腸をして私の臭いウンコを出させてください』とお願いしろ」
しばし絶句してしまった。
この男はとことん私を辱めるつもりなのだろう。
「か、浣腸をして私の…く、臭いウンコを出せてください…」
震える声で絞り出すように声を出す。
恥ずかしくて、悔しくて、私の目頭は熱くなった。
そんな私に満足したのか男はハハハと大笑いをして部屋を後にした。
「ほら、入れるぞ」
準備を終えた男はそう言った。
「は…い」
自らお尻を広げ、肛門を大きく曝け出した私のアナルに
注射器を大きくしたようなものが挿される。
「ん…」
ひんやりとした感覚が伝わる。
指とは違う冷たさに私の肛門はキュっとしまる。
それ気づいたのか男は遊ぶようにくるくると先端を回した。
「あ…んっ」
思わず反応してしまう。
顔は見えないが男はニヤニヤと笑ってるに違いない。
「ケツ穴で気持ちよくなってるところ悪いがそろそろ入れされて貰うぞ」
男がそういうと私の直腸に液体が流れ込んできた。
「あっ…あっ」
いままで感じたことのない刺激が私のアナルを滑っていく。
そして指では届かない奥の方までじんわりと冷たい感覚が広がっていく。
「う、うう…」
液体を入れられた。
ただこれだけの事なのに私の体は敏感に反応してしまう。
決して気持ちいいわけではないが未経験の刺激に私は身悶えてしまった。
「ハッハッハ。初めての浣腸でこの反応か。
やはり舞くんはアナルの素質があるな」
男は楽しそうにそう言うと二本目の水をバケツから吸い上げた。

「う…くぅ…」
何本入れられたのだろう？
お腹が張って膨張感でキリキリと痛む。
腹を下した時のように肛門に力を入れてないと今にも漏らしてしまいそうだ。
私は一縷の望みをかけてニヤニヤと笑みを浮かべる男に最後の懇願をした。
「お願いします…せめてトイレに…トイレでさせてください」
今にも漏れそうなお尻を押さえ屈辱的な土下座しながら私はそう言った。
だが男の答えは想像した通りのものだった。
「駄目だ」
たった一言。それだけだった。
絶望感が私を包む。もう長く我慢出来そうもない。
人前でウンチを漏らしてしまう。
羞恥心で動悸が激しくなる。

そんな私の様子を見ていた男が手に持った道具を肛門に突き刺してきた。
「あぅ…ッ」
堅く閉じられた肛門を無理やりこじ開けられる痛みに私は呻いた。
「そんなに糞をぶち撒けたくないなら栓をしてあげるよ」
「栓…？」
なるほど確かに入り口に物を入れればその分漏れにくくなる。
だけど男がいれたのはただの棒ではなかった。

「え？え？」

突然私はお尻の中が広がる感覚に襲われた。
「や…あっ…な、にこ…れ」
男が手に持ったポンプのようなものを握る度に私の中で栓が大きくなる。
「これはアナルバルーンと言ってね。
ポンプで空気を送ると膨らむようになってるんだ」
そう説明すると男はさらにポンプを握り空気を送り込んできた。
「あ、ああ…ッッ」
私のお尻の中でどんどんバルーンが大きくなる。
それに伴い耐え難い刺激も襲ってきた。
「や、やめ…これ以上大きくなったらお尻がッ」
いままでも指や道具でお尻の中を広げられた事はある。
だけどこれはそれを遥かに超えた膨張感だ。
トイレを我慢してる時に直腸が便で広げられる感覚。
それの何倍も大きくした激しい便意にも似た刺激が
私の肛門から駆け上がってきた。

「あ、あああ駄目ッッ！これ…ッ外し…てッ」
「おいおい、漏らしたくないって言うから栓をしてあげたんじゃないか。
これだけピッチリと閉じれば絶対に漏れることはないぞ」
「で、も…んんッ」
確かに漏れることはないかもしれない。
でもそれ以上に今までを超えるの便意が私を襲っている。
「あ…うぅ」
臀部を小刻みに震わせ必死に我慢してる私に男は
さらに大きな、酷く不安にさせるような笑みを浮かべて言った。
「それとな、これはただ震えるだけじゃないんだ。
バイブ機能もついているんだよ。」
「え？」
バイブ機能？　嘘でしょ？
ウンチを我慢して、さらにお尻の中を広げられて…
こんな敏感になりすぎてるアナルをさらに刺激なんてされたら…。
私が声も出せずにいると
男は本当に楽しそうにリモコンを見せつけてきた。
「やめ…て…」
私が消え入りそうな声でそう呟くと同時に
男はバイブのスイッチを入れた。
「あ、あああああああッ！！！」
お尻から伝わる激しい振動が下から上へ登るかのように
私の口から大きな声が出た。
「や、駄目ッ！　これッホントにダメェッッ！！！」
振動自体はそこまで大きなものじゃないのかもしれない。
しかし浣腸されてウンチを出させようとする排便感に加え
直腸の壁にみっしりと密着して刺激をダイレクトに伝えるバルーン。
漏らさないように肛門に意識を集中し続けた私は
その感覚を直に味わうことになってしまった。

「ひっぅううッ！　お尻ッ　駄目ッッ！　あっあっ」
あまりの刺激に私の体は小刻みに痙攣する。
アナルから伝わる感覚に耐え切れず括約筋に力が入ると
バルーンがさらに密着しより大きな波になって戻ってくる。
逆にバルーンを少しでも緩めようと力を抜くと
今度は浣腸によってどろどろになった便が排泄感を与え
さらにアナルは敏感になっていく。
我慢しようとしても出そうとしても
それは大きな衝撃として私に還ってくる。
「あ、あぁあ…ぁひッ…あっあっ」
私はもうどうすることも出来ず顔をグシャグシャにしながら
排便感なのかアナル刺激による快感なのか
最早どちらなのか区別も付かない強烈な感覚に晒されるしかなかった。
「酷い顔だな。もうそろそろ許して欲しいか？」
長らく無言のまま私の痴態を見守っていた男がそう切り出してきた。
「は…い…ごめん…ごめんなさい…もう、許してください…」
何に謝ってるのか、何を許してもらうのかわからないが
とにかく今の私の頭はこの状況から抜け出す事、ただそれだけだった。
「よしよし、それじゃ『このいやらしく感じる変態糞穴から臭くて汚い
下痢便ウンコをひり出す所を見て下さい』って大声でお願いしろ」
なんて下品ではしたない台詞なんだろう。
しかし今の私にはそんな事を逡巡してる余裕なんてなかった。
「こ、の…いやらしく感じる変態…糞穴から
臭くて汚い…下痢便ウンコをひり出す所を見て下さい…」
「声が小さい」
「この、いやらしく感じる変態糞穴から…
臭くて汚い下痢便ウンコを、ひり出す所を見てください！」
「もっと」
「こ、のぉ！いやらしく感じる変態糞穴からぁ！
臭くて汚い下痢便ウンコをひり出す所を見てくださいぃ！！！」
腹の底から叫ぶ私にはもう羞恥心やプライドなんてものは
なくただひたすらウンチしたいウンチしたいウンチしたい
ウンチしたいウンチしたいという排便欲求だけだった。
「ハッハッハ。そんなに言うなら見てやるよ
それじゃ自分力んでプラグごと糞を出すんだぞ」
「は…ぃ。自分で出すからぁ…ふんばるからぁ
早くウンチさせてぇえぇ…ッ！！！」
それを聞くと男は満足したように頷きバルーンの空気を抜いた。
その刹那、私は括約筋にあらん限りの力を入れ肛門を開いた。
「んん…フゥうううッッ！！！」
ブポンッ！！！！
ブリュッブチュッブピピピピピピピピィィィイイッッ
私の肛門から激しく吹き出す糞便。
時折ブピっと放屁を混じえ床一面を糞色に染めていく。
「ひ、あっぁあああああああッッ！！」
想像を絶する排泄の快感が私を襲う。
「あぅッダメぇッッイクッイちゃうぅうううううう！！！！！」
肛門から脳天へ快感の矢が突き抜けるように
私は排便しながら高く高く絶頂した。
あたりは私の糞便の臭気に包まれている。
私はそんな酷い臭いの中、絶頂感に浸り呆けていると
「何腑抜けた顔をしているんだ。今日の調教はこれからだぞ」
とお尻をパァンと叩かれようやく正気に戻った。
そう、これはあくまで準備にすぎない。
調教は始まったばかりなのだ。
「は…い」
私はよろめきながらベッドへと向かった。

あうッ♥ダメェッ♥
イクッ♥…
イッ♥奏ぅぅ♥
ビクッ
ビクッ
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ

奥付

発行日　2016/05/01
著者　もんぷち
印刷所　サンライズ
連絡先　lapislazuli17@gmail.com
Twitter　@monpetit17
HP　http://monpetit17.blog.fc2.com/

R18

For Adult Only